



## 活用しましょう「みんなの防災手帳」



今号では、11月19日号広報かまいしと同時に全世帯へお届けした「みんなの防災手帳」を紹介します。

この手帳は、東北大学災害科学国際研究所の監修で作成され、24時間テレビチャリティー委員会などの協力で寄贈されたものです。

手帳には、防災・減災のための日々の心がけや準備、災害が発生した際の対処法まで多くの防災・減災の知恵が掲載されています。

東日本大震災以後、災害対応のあり方について、「自助」「共助」「公助」といった役割分担の重要性が一層叫ばれるようになりました。

古くは江戸時代の米沢藩藩主：上杉鷹山が政の基本として、自ら助ける「自助」、近隣社会が助け合う「互助」、そして、藩行政が行う「扶助」の三助を定めていたといわれています。

す。これは、個人、地域、行政がそれぞれの役割を果たしながら協力し合うことで、より安心、安全な地域社会をつくる考え方によるものとされています。

災害は、規模が大きいほど地域社会に及ぼす影響も大きくなりますので、地域社会の総力を挙げての災害対応が必要になります。東日本大震災の例を見ても、コミュニティのつながりの強さが、災害対応に大きく力を発揮した地域もあり、それを支えるのはひとりひとりの意識と行動です。

いざというときのために、日ごろから防災手帳を近くに置き、基本的な防災対策の確認に活用しましょう。

防災行政無線の放送内容を無料で確認できます。ぜひご利用ください。(☎0800-800-3199)

## いのちを守る — 教訓と備え —

震災時、松原に最大で4000人を超える避難者がいた。コミュニティ消防センターにはギョウギユウ詰めで2000人程度、あとは近隣の葬儀場ホールに避難した。寒さが非常に厳しい中、反射式ストーブが1台しかなく、今でも思いつく限り身震いがする。地域の人たちの協力で、徐々に毛布や衣類が集まり、津波で服がぬれた人、辛うじて難を逃れたが負傷した人たちへの対応を優先した。避難所では、まず避難者全員の名前を書いて記録した。それが盛岡のラジオ局に届けられ、2日後に放送されたおかげで安否確認にもつながった。やがて、避難所を移動する人、仮設住宅などに入居した人の状況をすべて把握することにも役立った。自主防災

### 震災あの日あの時

〔避難所編〕

2

あつ 柴田 渥さん

(松原町内会事務局長)

避難所：松原地区コミュニティ消防センター

## 「地域主体で難局を乗り越えた」

避難所運営マニュアルなどの準備は必要と思うが、松原は土砂災害危険区域でもあるので、コミュニティセンターに備蓄などを集中させるのではなく、近隣の人たちで分担しあう方法も必要だと思ふ。

組織の本部もすぐに立ち上がり、消防団の協力を得ながら活動を行った。避難所の運営では、避難者が町内会の会員か否かを問わず公平・公正に接した。また、避難者にも積極的に避難所運営に携わっていただいたことなどで難局を乗り越えることができた。一方、生活上の細かいルー ルなどは決めず、清掃やテレビの視聴時間、消灯時刻などは避難者の自主性に委ねた。震災後4日間、地域はガレキに覆われ、閉じ込められた時は「松原は終わった：」と、とても心細い気持ちだった。ライフラインも止まり、トイレの問題もあった。避難所の近くにいつもは冬枯れするはずのわき水があったが、なぜか震災のときだけは流れ続けてくれて助かった。改めて水の大切さを実感した。